2019 年 5 月 10 日

～毎月 10 日は人権を考える日～

今もなお続く　水俣病患者たちの　声なき声

「そこらを這ったり立ったりできるほどのゆるみを与えられて、背負い帯などで、柱に、皮脂のうすいおなかをつないでおかねばならない。コタツやイロリの火の中に落ちこんでも、おおかたの子が助けを呼ぶことはできないのである。」（石牟礼道子『苦海浄土』第一章「椿の海」）

石牟礼道子さんが亡くなってから、２年が過ぎました。水俣病に冒された人々の声を汲み、私たちの社会に対する問いを投げかけているのが、石牟礼道子さんの『苦海浄土』です。

よく知られている公害病の一つ、「水俣病」。患者が出始めたころ、奇病と恐れられ、“村八分”にされました。原因が明らかになった後も、縁談が取り消されるなどの差別が続きました。１９５６年に水俣病患者が公式に確認されてから６３年が経ちました。しかし、今なおその症状に苦しむ患者が全国にいることは、あまり知られていません。認定患者約３千人に対して、潜在患者は１０万人ともいわれています。母親が妊娠中に水銀に汚染された魚を食べたことで、胎内で影響を受けた胎児性水俣病患者の坂本しのぶさん。2017 年、スイスで開かれた「水銀に関する水俣条約」締結国会議で訴えました。「何べんでも言ってきました。水俣病は、絶対に終わっておりません」。私たちは、この悲痛な叫びに真剣に応えなければなりません。水俣病は、教科書に出てくるだけの、もう解決された過去の問題ではないのです。患者の皆さんが抱えている現状、偏見や差別に苦しみながらも国や企業と闘ってきた歴史を、もう一度振り返ってみたいものです。

「杢は、こやつぁ、ものをいいきらんばってん、ひと一倍、魂の深か子でござす。耳だけが助かってほげとります。何でもききわけますと。ききわけはでくるが、自分が語るちゅうこたできまっせん。」（『苦海浄土』第四章）

杢太郎少年の祖父は、「孫は言葉を奪われている。しかし、その分だけ魂が深い。この子のなかには、賢者の魂が育っている」と言うのです。語られざる英知があるということに、石牟礼さんは気が付きます。そして、口にしたくてもできない人々の魂の声を代わりに言葉にしていきました。『苦海浄土』に描かれた小さな賢者たちは、単にかわいそうな存在ではありません。生きることの意味を教えてくれる魂の先達でもあるのです。

西条市人権教育協議会　　西条市人権擁護課